

SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

年間テーマ ～あきらめない 平和への道を とともに～

Vol.
100

2024. 9



イスラエルの空爆によって亡くなった弟の亡骸を抱く少年
X (旧 Twitter より転載)

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

巻頭言にかえて

～池田 雄一神父に聞く～

「苦しい人を助ける仕事」として司祭を選んだという池田雄一神父（83）は、今年で司祭生活 54 年（1970 年 7 月叙階）を迎えています。

長年、三重県の「アガペの家」で祈りと農作業に従事され、元気な頃は、阪神・淡路大震災や東日本の被災地に足を運び、ボランティア活動をされました。

現在、高齢者施設・ドムスガラシアで透析を受けながら生活しておられます。

この度、現在の思いを率直に語っていただきました。（取材編集・山田直保子）



若き日の池田 雄一神父（堺教会 HP より）

“苦しみと悲しみの体験を伝えること”

この施設は 90 歳以上の人たちが多くいますが、体調や食欲がなく食べきれないと思う時、必ず言う言葉は「残していいですか？」です。残すことに罪悪感があるからです。戦後の食糧事情が悪い時に生きてきた人たちです。成長の過程で一番果敢な時期に、十分食べ物がなかった。だから今自分が食べられる物を一つも残してはいけないと思っています。現代では通じない世界なのでしょう。やがて我々も消えていってしまう存在だけど、そういう部分がどう生かされるべきかと思います。

わたしの戦争体験

幼少期に戦争を体験した人達には共通なものが何かあります。

例えば、防空壕の中で過ごした体験。今の時代には遠い話かもしれないけれど、あれが現実だったんですね。

僕も子どもだった頃、空襲を体験しました。B29 がやってきて、大量の爆弾を落とすんですね。火の玉の形をしたものが無数に落ちてくる。まさに、雨あられというんでしょうか、音もしっかり覚えています。ザーッと大雨がふるような形で爆弾が落ちていく。焼夷弾が真っ赤な塊になってそれが押し寄せてくる。

私は 3 歳の時、神戸の東灘にいましたが、明石の山の中へ疎開しました。50 km あると思います。父は戦場にいましたから、母と、ポリオに感染して生まれた時から手足が不自由な叔父とおばあさんが大八車に乗っていたので、私は仕方なく歩かされました。

決して忘れてはならない事

今、ウクライナの子どもたちや老人たちが砲撃にさらされている。それも AI 武器を使った、いわゆる昔のロボット戦争です。自分の手を下さず、そういった機械化されたものによって人を殺す。

核を用いる大量破壊兵器もそのたぐいなのでしょう。人間の苦しみ悲しみが感じられない世界へ移りつつある。これは非常に悲しい。

我々は沖縄戦というものは映像でしか知らないけど、40万人が亡くなった。その人たちは実際に砲弾にさらされ、火炎放射器で焼かれて死んでいった。そういう苦しみや悲しみの記憶が戦後79年かなり遠のいていったように感じます。

自然災害もそうです。たとえば阪神・淡路大震災からもう29年経ったんですね。その時の悲しみを忘れてはいけません。

私は東日本大震災後、石巻に行ったんですけどね、凄まじかった。阪神・淡路大震災の時は家が潰された。でも津波の場合は根こそぎ無くなるんですね。残ったのは土台だけ。肉親を亡くし、そして家を無くしていった多くの人にはそこにたたずんで深い悲しみを味わったと思う。でもそういう事もだんだん記憶が薄れ、忘れられていくのですね。

今わたしに出来ること

今回の能登半島地震でも、家を無くした人たちがいる。生きる糧を失い、生きがいである仕事を無くし、よりどころを無くしていく、そういう苦しみはどこまで共有できるか。

自分としては何にもできない。体一つ動かさせない。そんな時にウクライナから逃れてきたマキシム君のことを知って支援をしようと思ったのです。(※)

亡くなった人、家を失った人のために祈っていますけど、私自身どこまで真剣に祈れているのか……。

人間は生きれば生きるだけ、悲しい部分が積み重なっていく。それは体験者が語ることでしか知る^{よすが}縁がないんです。それをどこまで表現できるか難しい。

私自身はこれまでのことを伝えるため、本を3冊書いたんです。その後、ここに来たんです。でも、もう自分はいっさい手足を使っては何もできない人間になっていく……。

最初に話した90歳以上のあの人たちが体験した貴重なものがある。でも、ある人はもう“認知”(認知症)がきている。夜に「誰か来て!」「助けて!」と大きな声を上げる。過去の体験から来るのかもしれない。まさに、人間の叫びのように聞こえました。

もちろん、そういう人たちを材料にはいけないとは思いますが、その真実を人に知ってもらいたいと思っています。

(※) 池田神父さんは、ウクライナ避難民のマキシム君が日本の大学に進学できるように、自分の著書を贈呈した人たちに呼びかけて、寄付金を集めました。)



マキシム君と池田 雄一神父



和歌山紀南ブロックの平和行事

和歌山地区紀南ブロック 紀伊田辺教会 石井 望 神父

紀南ブロックでは「平和旬間」期間中だけではなく、5月5日から平和を祈る102日が始まります。

① 5月5日の龍神村殿原のB29戦没米軍兵士慰霊祭

慰霊祭の由来は、1945年5月5日に米軍爆撃機B29が和歌山県龍神村殿原の山中に墜落し、機体とともに山中に散乱した搭乗員11人中7人の肉片を村人が拾い集めて埋葬し、6月9日に卒塔婆と十字架を立てて丁重に供養したのが始まりです(※1)。

戦時中にも関わらず「敵兵」の慰霊をした例は国内でも例外的だそうです(※2)。

以来、殿原区民は毎年「慰霊祭」を行い、「不戦・平和」のメッセージが語られます。式典では地域の大応寺住職が読経し、カトリックの司祭が祈りを司式します。

殿原慰霊祭式典の様様

その後村の語り部がメッセージを伝えます。

第80回の今年は、ゲストからの調査報告(※3)がありました。

パラシュートで村内に降下して捕縛された米兵二人は、大阪まで連行され、後日軍事裁判を経ずに憲兵隊により処刑されました。



うち一人の処刑はポツダム宣言受諾放送の後だったそうです。

国際法に反した捕虜の虐待処刑は、憲兵隊上層部からの「直接命令」ではなく「忖度して実行せよ」との指示だったという報告は、身近に起こりうる問題としても印象的でした。

一方で、選挙前の議員や市長代理が式典当日に最前列の来賓席を占め、メッセージを聞くことなく早々と退席される姿も印象的でした。

※1 古久保健著『轟音』『轟音～その後』DVD『轟音』

※2 中央大学編「日本全国 B29 慰霊碑物語」(正編・続編)

※3 林耕二「新緑の山々に囲まれた龍神村で不戦を誓う～墜落B29搭乗員の第80回慰霊祭で」民衆史研究会報 345号

② 紀南ブロック行事『平和祈願ミサ』と交流会

5月5日の殿原慰霊祭に合わせ、和歌山県南部の5つの小教区が龍神教会に集まり、共同祈願を持ち寄り、折鶴を奉納し、平和を祈ります。

ミサ後には交流会があります。コロナ全盛期には参加人数を制限し、各小教区のモニターへのオンラインミサも試みました。



教会同士の距離が遠く、高齢化も相まって参加者は減少する一方ですが、アジア各国の技能実習生たちが参加するようになったのは希望です。

コロナ下でのオンラインミサ

③ 紀伊田辺教会の平和行事

6月に入ると、沖縄戦の時期に合わせて、紀伊田辺教会聖堂の交流スペースで「沖縄戦パネル写真展」をします。

8月には「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展」に入れ替えたり、参考資料の閲覧、折り鶴コーナーを設けたりもします。たまには通りがかりの人や教会訪問者の閲覧もあります。

8月6日から15日までの「平和旬間」の間には、戦争と平和を考えさせるテレビ番組が多くあります。教会で鑑賞学習会を計画しても猛暑下での参加はわずかです。

自宅で番組・録画鑑賞した後に、教会で分かち合う企画も出ています。そして8月15日の被昇天ミサは平和を祈るときでもあります。

沖縄戦写真展ポスター（紀伊田辺教会）



沖縄戦写真パネル展（紀伊田辺教会）



平和コンサートのポスター

④ 地元の市民グループとの連携協力

コロナ前までは例年5月の憲法記念日の頃、地元の「ピースフェスタ」に教会も参加協力していましたが、中断したままです。

現在は他の市民グループの呼びかけで行われる平和チャリティーコンサートに協力しています。教会のログハウスを会場に、不戦や平和を願う様々な人やグループの緩やかなつながりが育っているように感じます。



⑤ 戦跡マップ作り～「身近で見える化」する

「ピースフェスタ」をきっかけに作成した紙ベースの「田辺の戦跡マップ」を、地元の新聞社の戦争体験者の記事内容と連携したデジタルマップにできないか検討中です。

田辺市近辺は太平洋戦争末期に海軍初年兵養成所（海兵団）が設けられ、紀伊水道を北上する「敵艦」をターゲットにした特攻基地が多く計画された土地ですが、大規模な戦災地域ではなく、目に見える資料、展示や標識などもわずかです。

忘れてはならない「負の歴史」を身近で見える化することが課題です。

平和旬間行事に参加して

豊岡教会

ビスカルド篤子

8月4日、豊岡教会の平和旬間に参加しました。

早朝から張り切って特急電車に乗ったものの、福知山辺りが大雨で電車が遅れ、行事に遅刻してしまいました。「ここらは天候によって列車がしょっちゅう遅れます」とタクシーの運転手さん。雨上がりの山に霧がかかったのが美しかったです。

豊岡教会では、こども向けのアニメ DVD を鑑賞したあと、皆で輪になって分ちあいをしました。

最初は DVD の作品内容についての感想が聞かれましたが、そのうちにお父さんやお兄さんなど戦地へ赴かれた家族のお話しをされた方が何人もいて、身につまされました。

またフィリピン出身の方は「確かに私たちは日本から被害を受けましたけど、もう前を向いて歩んでいきたい」と決意を語っていました。

行事には、一人だけ小学生の女の子が参加していました。恥ずかしくておばあちゃんの後ろでずっともじもじしていましたが、教会の皆さんに可愛がられているのがよくわかりました。

この子の将来を守るために、戦争を起こしてはいけない、ただそれだけで参加者の心が一致していたようでした。



「子どもたちに平和を遺そう」と語る委員長の和多田さん



それにしても豊岡教会には池つきの広い庭があって、緑によく映える石造りの聖堂がとても素敵でした。

今度は、是非ミサから参加したいと思いました。



豊岡教会の美しい聖堂外観と日本庭園

カトリック豊岡教会の建物は、生野銀山の開発や足尾銅山などの経営で財を成し、「鉱山王」と呼ばれた中江種造氏の別荘として1922年に建てられました。1950年に豊岡市に寄付され、翌年の1951年に淳心会により、この地に教会設立。

(参考：『カトリック大阪大司教区再宣教 150周年記念誌』)

平和旬間行事に参加して

生野教会・なみはや教会

シナピス事務局 山田 直保子

私は8月11日に生野教会となみはや教会の平和旬間行事に参加しました。

生野教会では、10時から行われた平和祈願ミサに^{あずか}与り、そのあと関西合唱団による聖歌やオリジナル曲などを聴きました。この中にはシナピスで支援している難民移住者とスタッフの事を描いた歌もあり、私はグッと来るものが抑えきれず泣きながら聴いていました。

同じように、日本の中で生き辛い状況を抱えている韓国の若者も涙していて、歌というものは万国共通でどんな状況の人でも、心の中にそっと寄り添えるものだなと思いました。

最後の曲は「皆さんで歌いましょう。1番が『ふるさと』、2番が『アリラン』、3番は『ふるさと』と『アリラン』を一緒に歌います。さあ3番はどうなるでしょうか？」と声掛けがあり、韓国の方が多いい生野教会ならではの提案にワクワクして、私は「ふるさと」を一生懸命歌い、両隣の方は「アリラン」を歌われていました。

びっくりしたのですが、全く別の歌なのに本当に不思議。ちゃんと交わっているのです。

歌いながら横の人とびっくり顔と笑顔で本当に感動しました。日本人と韓国人が母国の歌を同じタイミングで歌い、交わっている。本当に素晴らしかったです。

そのあと、なみはや教会へ。

平和旬間行事の最中で途中参加でしたが、偶然にも、なみはや教会でも歌を歌っておられました。日本人信徒による歌とフィリピン・コミュニティによる歌を聴くことができました。こちらも大好きな歌でノリノリでしたが一体感があってとっても良かったです。

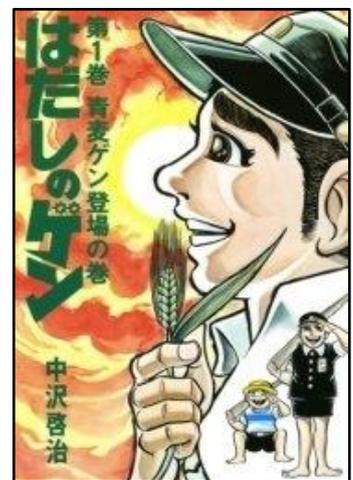
聴きながら皆さんが一つになり一緒に歌って心から平和を願っている！

私はこの機会にもっと知らなければと思い、「はだしのゲン」を読みました。「はだしのゲン」は遠い昔、私がこどもだった頃、皮膚が溶ける絵があまりに衝撃的で、怖くて読めなかったものでした。「はだしのゲン」全巻を通して読み、特攻隊の映画も観ました。

とても辛い現実、でも私たちは戦争経験者のお話になったことを伝え続けたいといけないんだ、と改めて思いました。

2023年、広島市の平和教育副教材から漫画「はだしのゲン」が削除され、波紋を呼んでいました。いろんなことに理由をつけ削除し、正当化し、今の若い人から戦争の現実を避けているようにも感じられました

「火垂るの墓」も毎年この時期に放送されていたのに、いまは地上波で放送されなくなっている。こういうことを考えても、ドムスガラシアにおられる池田神父様のお話が自分の中でとても勉強になっていて、「伝える人がどんどんいなくなっている。今の若い人に伝え続けなければならない」とおっしゃっていた意味がとても重く響きました。



『はだしのゲン』第1巻
表紙(作:中沢啓治)
汐文社

平和旬間行事に参加して

六甲教会

岡田 雅代

アフリカのルワンダで義肢製作所を開き、無償で8,000人以上の障害者に義足や装具・杖などを提供してこられた、ガテラ・ルダシングワ・エマニュエルさん・ルダシングワ真美さんご夫妻のお話を8月11日(日)、六甲教会で聴かせていただきました。

ガテラさんは故国ルワンダの紛争から逃れる難民として、真美さんはスワヒリ語を学ぶために滞在しておられたケニアで、お二人は出会います。

幼い頃、病気の治療ミスで片足が不自由になったガテラさんは、装具をつけておられるのですが、真美さんの招きで滞在していた日本で、その装具が壊れてしまいます。

それをなおすために訪れた義肢製作所で、「義肢をつくる技術はルワンダで必ず役に立つ。虐殺や地雷の被害にあった人たちや障がいをもつ人たちに、義足を作りたい」と意を決したお二人は、この思いを元に「リンディ／ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」を立ち上げます。

義肢製作所の開所以来、何度も訪れる苦難を乗り越え続けて、現在に至っておられます。

「ルワンダ」というと、どうしても1994年の大量虐殺のことが思われます。その凄惨さもさることながら、そのいくつかは、ツチ族が正規軍からの避難を求め逃げ込んだ教会で行われたこと、教皇フランシスコが1997年にルワンダ共和国のカガメ大統領をバチカン宮殿での個人謁見に招き、その大量虐殺(フツ族過激派による80万人から100万人に及ぶツチ族とフツ族穏健派の殺害)が行われた際、カトリック教会の犯した過ちについて、痛悔の気持ちを伝えられたことなどをかえりみ、「なぜ教会が、なぜ聖職者が」と答えの出ない問いを巡らせずにはおれません。その昔、ルワンダの人びとは平和に暮らしていました。もともと一つであったルワンダの国民を、民族に分け、互いに敵対するように仕向けたのは、この国を植民地支配していたベルギーによる政策です。「ベルギーはカトリックの国なのになぜ」と考えると、お腹のなかをかき回されるような息苦しさを覚えました。

また、このようなことも考えられます。「加害者はフツ(民兵)、犠牲者はツチ、ルワンダ愛国戦線(RPF)のカガメ大統領は大量虐殺を終わらせた救世主」ということになっていますが、本当にそうなのでしょうか。そんな単純なことなのでしょうか。いまでも続くルワンダの隣国コンゴ民主共和国(以下、コンゴ)での紛争は、このときRPFがコンゴに侵攻し、コンゴ人とフツ難民を大量虐殺するとともに、コンゴの天然資源の支配を得たことに端を発しているのではないのでしょうか。

「それは、こういうことだったのだ」と単純でわかりやすい図式を好んでしまいがちなのですが、「それはとても危ういことなのだ」と私はこの機会に学びました。また「教会も聖職者も信徒も過ちを犯す。私自身も必ず犯す」とも。

日本とルワンダとを往復しながら、活動を続けておられるルダシングワご夫妻。参加者からの「どうしてこのようなしんどいことに取り組まれたのですか」との質問に、真美さんは「彼(ガテラさん)によい装具をつけてもらいたかったから。彼のためでなければ、やってこられなかった」とお答えになられました。「誰かのために」、「この人の役に立つのだったら」、「たった一人の小さな思いでも、信念をもって続けられるとき、そこにはまちがいのない何かが生まれていくのだ」との思いを強くしていただきました。

素晴らしい講演会を開催して下さった六甲教会の皆さんに感謝します。ありがとうございます。

*興味のある方は、ぜひご覧ください HP:「ムリンディ／ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」で検索
書籍:『ゆるしへの道〜ルワンダ虐殺から射してくる、ひとすじの光〜』

著者:イマキュレー・イリバギザ スティーブン・アーウィン (女子パウロ会)

小さなトイレに身を隠して約100日間、虐殺を奇跡に生き延びたツチ族の女性イマキュレーの個人史が、彼女の信仰を歩みとともに語られています。

▶映画「ホテル・ルワンダ」は、「本当のルワンダの姿ではない」とガテラさんはお話しされていました。



平和旬間行事に参加して

池田教会、大東教会

大森 雄二

平和旬間のチラシ作りをお手伝いした縁で、二つの教会の企画に参加した。

一つは、池田教会でのパレスチナ問題の講演。

容赦ない空爆と同時に、遺体を埋め、がれきを撤去して整地するためのブルドーザーが存在する戦場の異様さを、講師の西口 信幸さん（夙川教会信徒）は強調された。

さらに衝撃的だったのは、ガザの土地が欧米の不動産市場で売りに出されていること。イスラエルという国の正体を見せられた気がした。

分かち合いでの「何ができるか」という質問に対し、西口さんは、パレスチナ子どものキャンペーン（認定NPO法人）への支援を提案された。

劣悪な環境の中を生きているパレスチナ人を今も支援する唯一の日本の援助組織だそう。 「シナピスは何もしないのか」という声には、少し困った顔をされてから、「シナピスは抱えている問題が多過ぎて人手不足。皆さん一人一人ができることを通して仲間となってほしい」と返された。

今回の講演の前に私は、『ガザとは何か』（岡 真理著 大和書房）を読み終えた。多くの示唆に富む熱量の高い本でした。ぜひ、皆さんにも手にしていただきたいと思いません。

もう一つは、大東教会でのミャンマー難民・ミヨウさんのお話。ミヨウさんと四年の付き合いとなる大東教会の方も初めて知る、彼の生い立ちにまず驚かされた。

見通しの暗い自身の難民認定の行方に加え、病気からのストレスを告白されたミヨウさんであるが、祖国の未来を語り始めると、一転して明るい顔を見せた。

国軍はもはや、中部の大都市を含む平野部以外の支配を失っており、徴兵令を出してから警察は市民からさらに嫌われ、制服を脱いでも街を出歩けない状態だそう。

国軍について語る時、ミヨウさんの口調は激しさを増し、憎しみの強さを感じさせられた。「強制送還されれば間違いなく殺される」と何度も口にしたミヨウさんだが、お隣のバングラデシュで最近、首相が国外へ逃げたように、軍のトップが中国への脱出準備を始めたとの噂もあるそうで、軍政からの解放はそう遠くないと言い切った。

その言葉で、ミヨウさんが自分自身を奮い立たせているように、私には思えた。

もう一つ、シナピスニュースの忘れない・あきらめないカレンダーにあった辺野古に関する集会にも参加しました。詳しくは次号で報告します。

ガザの悲惨な状況を見るにつけ、いたたまれない気持ちになる人が多いことでしょう。教会での学習会、映画上映会など、ガザを知る多くの学びの場も設けられています。そんな中で、パレスチナへの緊急支援を考えている個人、団体もあるようですので、緊急支援として考えられる団体を紹介させていただきます。

今年の4月、一時期停戦のあとで、いくつかの国際支援団体がガザ入りしましたが、イスラエル軍によって、7名の海外支援団体メンバーが爆撃によって殺されてしまいました。この殺戮を受けて、5月以降はほとんどの支援団体がガザに入ることができなくなりました。



8月15日にも空爆を予告するビラが配られて指定された地域から逃げることになりました。そんな中で支援活動ができるのは UNRWA と現地スタッフを擁する NPO のみ、日本の関係する NPO では、パレスチナ子どもにキャンペーン (CCP)、日本ボランティアセンター (JVC)、ピースウインズなどがろうじて活動をしています。今は CCP 以外は現地スタッフによる現金支援が限度のようです。CCP は2日に一度、「ガザ速報」を Youtube で発信しています。また、先ほど、特別支援要請の Youtube も掲載されました。子どもの笑顔が混じる貴重な映像です。ぜひご覧ください。

【CCP ガザ緊急支援】

<https://youtu.be/N0zjDPMbZGI?si=uJBlyG8eHxsPcSDc>



記事を書いている今、停戦に向けて協議が行われていますが、その前にアメリカによる空母の派遣を含む追加の軍事支援をおこなっており、イランとイスラエル、アメリカは一触即発の状況にあります。それによって一番、苦しむことになるのは荒地となったガザに閉じ込められた 150 万の市民、そして子どもたちです。

パレスチナの支援は多くのルートがありますが、現地で今、動いている団体を中心に支援をお願いします。活発な団体として、今回はパレスチナ子どもキャンペーンの紹介をします。緊急支援のチラシを同封しますので、ご覧ください。

一つの動きとして若者を中心に SNS による個人支援、グループ支援の動きがあり、今年に入って非常に多くの情報があります。これからの緊急支援の方法として注目されています。ただ、大半は個人レベルや、意気投合したグループの活動です。信憑性、継続性を考慮せねばならず、ネット決済や個人情報流出も考慮せねばなりません。団体レベルではお勧めできませんが、SNS を見て個人レベルでできる支援をお願いします。

情報は以下の OLIVE JOURNAL にもありますし、SNS で多く流れています。くれぐれも注意して接触をしてください。



何が起きているのか、なぜ悲惨事を止められないのか、私たちはどこに立脚して識別すれば良いのか、いっしょに考えていければ、と願っています。関心のある方はシナピスにご一報ください。

【参考資料】

OLIVE JOURNAL 市民が作るパレスチナ情報サイト
支援先も含めてパレスチナを知る情報が満載です。

<https://olivejournal.studio.site/>



UNRWA 国連パレスチナ難民救済事業機関（日本語特設サイト）
パレスチナ難民のための皆様のご寄付をよろしくお願ひします。

<https://www.unrwa.org/japan70th/donation/>



パレスチナ子どものキャンペーン ガザ緊急支援 呼びかけサイト

<https://ccp-ngo.jp/project/gaza/>



ピースウィンズ パレスチナ・ガザ緊急支援 呼びかけサイト

https://jp.peace-winds.org/support_palestine-gaza



日本国際ボランティアセンター
パレスチナ・ガザ緊急支援へのご寄付のお願い

<https://www.ngo-jvc.net/gaza.html>



オルター・トレード・ジャパン
「ガザの飢餓を止めろ」キャンペーン報告

<https://altertrade.jp/archives/31206>



自分のアイデンティティが呼び覚まされる

C.W

7月28日に寺田町公園で開催された「聖和サマーフェスタ」で、子ども達がブラジルの伝統格闘護身術カポエイラを披露すると言うので、僕はシナピスカフェのお客さんに誘われて、遊びに行きました。

フェスタでは、食べ物や物品の出店やステージもあり、様々なコーラスやダンスなどを披露していました。

子どもの頃にカポエイラをしていましたが、日本で見るのは初めてでした。

「カポエイラグループ・アウマネグラ」の先生とお会いし、ポルトガル語で挨拶しました。でも、僕が「日本語、わかりますよ」と言うと、先生は「良かった！」と笑顔で日本語でお話してくれました。

ステージの出番直前だったのですが、実家がある場所の話や、先生が住んでいたブラジルの場所の話など、先生は丁寧に僕の話聞いてくださり、またお話しをしてくださり、「楽しんでね！」と準備に向かわれました。

さぁ！いよいよカポエイラの始まりです。

ブラジルの楽器ピリンバウ、パンデイロ、アタバキで演奏が始まり、先生の美声で一気にその場がブラジルに帰ってきたと錯覚を起こすような感覚になりました。

最初は柔軟体操から始まり、だんだんとカポエイラが始まっていきました。

みんなとても上手なので、「身体が柔らかい子どもの時から始めると、カポエイラが一番上手になる」と母が言っていたことを思い出し、懐かしい気持ちになりました。

カポエイラを習っていた場所、周りにいた友達、通った風景などが、一瞬で頭の中によみがえってきて、胸がいっぱいになりました。

とても上手な女の子もいて、あの子は続けたら必ずうまくなると思います。

次の機会には、先生や大人の人のカポエイラも見てみたいなと思いました。

楽しかったです。ありがとうございました。

いろいろな場面で、カフェのお客様にお誘いを受けることは良くありますが、警戒心が人一倍強いCさんはなかなか外へ出て行きません。それが、「カポエイラをする」と話をすると「行きたい！見たい！」と珍しく大喜びし、祭りの開催日を心待ちにしていました。日本に来てからこういう機会は全くなく、ステージで子どもたちがカポエイラをしているのを見て、一瞬で子どもの頃の記憶が戻ったと言います。子どもたちが準備で体を動かしている時には、「これはカポエイラじゃないよ」と私に教えてくれたり、「この音楽はこうでね・・・」「あの子は上手い！あの年から続けたら、必ず上手くなる」などと、動画を撮りながらお話が止まらない程喜んでいました。連れて行って、本当に良かったと心から思いました。こんな嬉しい出逢いをいただき、ありがとうございました。

(山田 直保子)

注：カポエイラとは 1500 年頃から始まったポルトガルのブラジル植民地時代に、アフリカから連れてこられた黒人奴隷達がブラジルで自由を勝ち取るために編み出した格闘護身術です。あらゆる角度から繰り出される鋭い蹴り技を中心とした、武道ダンス、アクロバット、音楽など、儀式的な要素が結合されたブラジルの伝統文化です。





小冊子・リーフレットのご紹介

シナピス運営委員 嶋田 至

シナピスの事務所には、さまざまな小冊子やリーフレットがあります。前回に続き、そのなかから以下の3冊をご紹介します。

『原子力発電は“温暖化”防止の切り札ではない！<改訂版>』

(日本カトリック正義と平和協議会、2022年)

「地球温暖化対策には二酸化炭素を出さない原子力発電（原発）が切り札である」という言説が、政府やマスメディアによって発せられています。しかし、原発の燃料となるウランの採掘や濃縮・加工、発電所の運転、老朽化した原発の解体や廃炉、使用済み核燃料の長期間の管理など、原発を動かす過程で、膨大なエネルギー供給システムが必要です。しかも、原発事故など大きなリスクも抱えており、原発は地球上の生命にとって最悪の選択とも言えるでしょう。このリーフレットには、原発が抱える問題点がコンパクトにまとめられています。

『国籍を越えた神の国をめざして 改訂版』

(日本カトリック司教協議会 社会司教委員会、2016年)

1993年、日本国内に外国人移住者が増えつつあった頃に司教協議会が出したメッセージを、2016年に改訂したものです。そもそも教会は、言葉や生活習慣、文化などの違いを超えて、多様な人たちをひとつに包みこんでいく共同体です。さまざまな違いは、ときには摩擦や葛藤を招きます。しかし、このような体験を通して教会共同体は豊かになっていくものです。私たちが差別や排外主義に傾かず、多様な人たちを尊重していくために、あらためて心に刻んでおきたいメッセージです。

『教皇ヨハネ・パウロ二世「広島平和アピール」』

(日本カトリック司教協議会 社会司教委員会、2011年)

「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」で始まる、教皇ヨハネ・パウロ二世の平和アピールです。教皇は1981年2月に「平和の巡礼者」として広島を訪れ、世界に向けて核兵器の廃絶を訴えました。教皇は、「過去をふり返ることは将来に対する責任を担うことです」という言葉を何度か繰り返しました。教皇の広島訪問から40年以上がたった今、あらためて過去に何がおこり、私たちにどんな影響を与えたのかを真摯にふり返ることが大切です。これからの私たちの生き方を考える上で、大切なメッセージが記されています。

ここでご紹介した他にも、さまざまな小冊子やリーフレットがシナピスに置かれています。ご興味を持たれたらシナピスまでご連絡ください。無料で頒布していますので、教会での分かち合いや学習会などで、ぜひご活用ください。



シナピス事務局こぼれ話

ビスカルド篤子

8月19日 虫歯になったら歯を抜く歯医者

難民申請者のハメドさん（仮名）を歯科へ連れて行きました。

ハメドさんは歯が悪く、うまく食べ物を咀嚼できず固い物が食べられません。また前歯が上下ともすり減って前歯の隙間から物がこぼれたりするので、彼は人と食事をしないようにしています。もう四六時中「歯」で頭がいっぱいで、ハメドさんは人前で笑うことができず、だんだん人目を避けて暮らすようになりました。私たちは、無料低額診療事業をやっている病院に頼み、彼の虫歯を治療してもらいましたが、矯正などは適用外ですので支援は打ち切られました。

この日、私はハメドさんを歯科大病院へ連れて行き、無保険ならどれくらいお金がかかるか試算してもらいました。歯科医が「奥歯が殆どありませんね」と言うと「入管、抜いた」とハメドさん。長崎県の大村入管センターに収容されていた時に歯痛を訴えると、治療せずに歯を抜かれてしまったのだそうです。「6本、7本覚えてない。いっぱい。」

今の日本でそんな荒療治をする医者がいるのでしょうか。小指の先を怪我したら治療せずに小指ごと切断するようなものでしょう。一生大事に使わないといけない歯を抜いてしまうとは。奥歯を7本も抜かれたハメドさんは顎が段々へしゃげるようになってきたといえます。私はハメドさんの口の中を見て哀しくなり、改めて憤りを覚えました。歯を返したってんか。

歯科医はハメドさんの背景事情を知り、できるだけお金をかけずに、本人の最も気にする前歯の「見た目」を良くする策を練ってくれました。提案された額ならハメドさんが生活費を切り詰めれば何とか分割で支払えそうです。行って良かったと思いました。

紛争や自然災害で避難生活を余儀なくされる人びとの中にも歯痛に悩む人がきつといるでしょう。いえ、兵士として前線で戦う人も、です。神経に触る虫歯の痛さにどう耐えているのだろうか…。

7月□日、8月△日×日 シナピスシャトルカー、出勤～！！

裁判所に病院に法律事務所にと、連日支援活動で走り回る私たちに強力な助っ人たちが現れました。運転免許を持つ難民さんたちです。

ある日の私のスケジュールは、病院と法務局と銀行廻りでした。電車を乗り継げば一日仕事でした。でもその日は、難民さんが運転して送迎してくれたお陰で格段にお金と時間を節約できたのです。

難民さんたちの運転する送迎車。これは重宝します。送迎車のお陰で最近では高齢者や体の不自由な人もボランティアに来ていただけるようになり、センターに出入りする人の層に厚みが出てきました。

ホテルの送迎車に連なって森ノ宮駅で人を待つシナピスシャトルカーなんてカッコいいではありませんか。皆さんもぜひご利用ください。ボランティアに限らずシナピスに御用のある方、森ノ宮駅からの道のりが不安でしたら一度お電話ください。

ただし！その日のその時間に、たまたま空いている車があって、たまたま免許を持つ難民さんがいれば、に限りませうけれど。



地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス（からし種）です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、愛し合うように願って平和の種をまき、やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

シナピス年間テーマ～「あきらめない 平和への道をともに」～

シナピスの風

第171号 2024年9月1日発行

9月の祈り

すべてのいのちを守るためのキリスト者の祈り

宇宙万物の造り主である神よ、
 あなたはお造りになったすべてのもの
 ご自分の優しさで包んでくださいます。
 わたしたちが傷つけてしまった地球と、
 この世界で見捨てられ、忘れ去られた人々の叫びに
 気づくことができるよう、
 一人ひとりの心を照らしてください。
 無関心を遠ざけ、
 貧しい人や弱い人を支え、
 とともに暮らす家である地球を大切にできるよう、
 わたしたちの役割を示してください。
 すべてのいのちを守るため、
 よりよい未来をひらくために、
 聖霊の力と光でわたしたちをとらえ、
 あなたの愛の道具として遣わしてください。
 すべての被造物とともに
 あなたを賛美することができますように。
 わたしたちの主イエス・キリストによって。
 アーメン。



(2020年5月8日 日本カトリック司教協議会認可)

病者・障がい者とともに歩む

ミサのご案内

■日時：9月23日(月・祝) 14時～

■場所：大阪高松カテドラル

聖マリア大聖堂

*ミサ後分かちあいを予定しています。

昨年度より実行委員会形式で実施しています。

ご意見お待ちしております。

dis@ostk.catholic.jp

インターナショナル・デー INTERNATIONAL DAY 2024

2024年10月20日 Sun

11時～ 国際ミサ

12時30分～16時 交流会

St. Mary's Cathedral

大阪高松カテドラル 聖マリア大聖堂

シナピスホーム カフェ

★9月の開催は7日のみ

7日はランチを開催します

11時～16時ごろ

活動へのご支援ご協力を

よろしくお願いたします。



**お使いにならない外国語の聖書があれば、
ご寄付ください！**

拘置所や刑務所、入管などに拘禁されている海外出身
の人たちが、聖書を求めています

*日本語の聖書は不要です

☎06-6942-1784

シナピスニュース9月号の目次

- ・巻頭言にかえて～池田雄一神父に聞く
- ・紀南ブロックの平和行事 (石井神父)
- ・平和旬間の参加報告
(豊岡、生野、なみはや、六甲、池田、大東)
- ・パレスチナ緊急支援 (西口さん)
- ・自分のアイデンティティ～カポエイラのお話
(C.Wさん)
- ・小冊子の紹介 (嶋田さん)
- ・シナピス事務局こぼれ話 (ビスカルドさん)

シナピスニュースをご希望の方は、シナピスに
ご連絡ください。

活動へのご支援ご協力を
よろしく願いいたします。



お使いにならない外国語の聖書があれば、ご寄付ください！

拘置所や刑務所、入管などに拘禁されている
海外出身の人たちが、聖書を求めています

*日本語の聖書は不要です

☎06-6942-1784

シナピス公式

さまざまなお知らせや情報を発信！
友達追加は 📱 QRコードから 📱



HPはこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

ニュースレター配布停止ご希望の方は
シナピスまでお知らせください。

あとがき

8月の平和旬間では、各小教区でさまざまな祈りや学習会などがおこなわれました。今号では、スタッフが訪れたいくつかの教会での報告を掲載しました。

過去を丁寧にふりかえったり、今起こっている戦争や差別を知ることは、けっこう感情が揺さぶられるものです。でも、感じたことを率直に語りあったり、ともに平和を祈ることで、事実を素直に受け入れ、より良い社会や教会をつくっていかうという気持ちが高まってくるものだと思います。

報告を読みながら、平和旬間の準備や運営に関わった方々のことが思い浮かびました。この猛暑のなか、意見の対立、突然のトラブル、募る疲労感...。ときにはカブくで思い通りにしたいという衝動が起こったかもしれません。

教皇フランシスコは『兄弟の皆さん』のなかで、「社会平和は骨の折れる手仕事です」と書いています。考え方も価値観も多様な私たちが協働するときには、葛藤がつきものです。でも葛藤を乗り越えて無事にイベントを終えると、お互いのことがちょっと理解できたような感じがするものです。そんなことの繰り返し、教皇の言う「真の堅固な平和」につながるのかもしれない。(I)

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆ 広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆ 大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆ 学習会研修会の企画

◆ こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆ 日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆ 人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆ 難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



● 公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

● 車でお越しの場合

阪神高速 13 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐ 郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪大司教区シナピス

☐ 三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐ オンラインはこちら →→→

